

活動団体一覧表(小学校編)

活動団体一覧表(小学校編)			活動の分析から ESDの要素(生きる力)の視点で重視する項目							掲載 ペー ジ
番号	活動団体等	主な活動場所等	能力				態度			
			1 批判的 に考える 力	2 未来像 を予測して 計画をた てる力	3 多面的 、総合的に 考える力	4 コミュニ ケーション を行う力	5 他者と 協力する 態度	6 つながり を尊重す る態度	7 進んで 参加する 態度	
H27 1	特定非営利活動法人 キッピーフレンズ(兵庫県)	兵庫県三田市 兵庫県立有馬富士公園			○	○	○			46
H27 2	京都森林インストラクター会(京都府)	京都市 衣笠山国有林			○	○	○			49
H27 3	大山横手道上ブナを育成する会(鳥取県)	鳥取県伯耆町立八郷小学校 大山国有林外			○		○		○	53
H27 4	岡山県西粟倉村教育委員会(岡山県)	岡山県西粟倉村内			○	○	○	○		57
H27 6	特定非営利活動法人 とよなか市民環境会議アジェンダ21(大阪府)	豊中市立環境交流センター 豊中市立青少年自然の家			○		○	○		62
H27 7	特定非営利活動法人 クワガタ探検隊(大阪府)	大阪府箕面市 箕面公園滝道 外		○				○	○	65
H27 8	特定非営利活動法人 イー・ビーイング(大阪府)	大阪府泉南市 紀泉わいわい村の里 山、奈良県吉野町、大阪市内			○			○	○	68
H27 9	極楽橋森林整備プロジェクト実行委員会(和歌山県)	和歌山県伊都郡高野町 高野山国有林外			○					71
H27 10	特定非営利活動法人 バイオマス丹波篠山(兵庫県)	兵庫県篠山市内小学校、里山			○	○		○		75
H27 11	公益財団法人 吉野川紀の川源流物語(奈良県)	奈良県吉野郡川上村吉野川源流 森と水の源流館			○			○		79
H28 1	NPO法人里山倶楽部 河南町立河内小学校(大阪府)	大阪府南河内郡河南町 弘川寺歴史 と文化の森、茶の木原学校林			○	○			○	82
H28 3	森と水の源流館 川上村立川上小学校(奈良県)	奈良県橿原市、吉野郡川上村			○			○		86
H28 4	下松市立米川小学校(山口県) 米川地区教育造林振興会	山口県下松市 米川小学校校区				○	○	○		90
H28 5	庄原市立峰田小学校(広島県) アサヒグループホールディングス(株)アサヒの森環境保全事務所	広島県庄原市 峰田小学校 アサヒの森			○		○	○		94
H28 6	箕面市立豊川北小学校(大阪府) (箕面森林ふれあい推進センター外)	大阪府箕面市 箕面国有林、 箕面市立豊川北小学校			○	○	○			100
H28 6	箕面森林ふれあい推進センター 大阪森林インストラクター会 箕面ビジターセンター(箕面市立豊川北小学校)	大阪府箕面市 箕面国有林、 箕面市立豊川北小学校			○	○	○			104
H29 6	橋本市立清水小学校 橋本ひだまり倶楽部(和歌山県)	和歌山県橋本市 ひだまりの郷			○	○	○			108
H29 7	土地に根ざした学びの場・まるやま組 輪島市立三井小学校(石川県)	石川県輪島市三井町	○		○			○		117
H29 8	箕面市立止々呂美小学校(とどろみの森学園) NPO法とどろみの森クラブ(大阪府)	大阪府箕面市森町			○	○			○	123

事例報告 H27-1

団体名： 特定非営利活動法人 キッピーフレンズ （兵庫県）

プログラム名： NPO法人キッピーフレンズが行っている環境体験学習について		
(1) プログラムの目標	兵庫県が県下の全小学校3年生に対して行っている環境体験学習要項に基づき①命の大切さ、つながりを知る、②自然の美しさに感動する豊かな心を持つ、③自然観察、農業体験等を行う、④五感を使って学び、体験する、⑤先生以外の人々や専門家から直接学ぶ、⑥学校を離れる等の目標を持って行っています。	
(2) プログラムの概要	1、自然観察（引率型、オリエンテーリング型） 2、森のお掃除（森林整備） 3、工作（森で得られる自然材料を使った工作） 4、拡大スクリーン（顕微鏡、拡大ルーペの映像をスクリーンに拡大する） 5、水辺の生き物調査 6、学習センター展示室等の案内・解説 等を学校側の要請、時間、生徒数、既に実施した環境体験学習の内容等を考慮して先生と打合せを行い決めている。	
(3) プログラムの展開		
時間数	プログラムタイトル	
	活動内容	指導・支援の方法、ポイント等（教材等）
	自然観察探検シートの作成	
	自然観察のポイントになる6カ所程度の質問型探検シートの作成し、生徒に持たせて簡単に感じたこと、新しい発見、驚いたこと等を記入させる。	スタッフからの一方的な説明、案内にならないように、生徒が自ら考え、発想し、疑問点を引き出すようにしている。
2	自然観察 公園に設置されているキツネの巣の模型、温度計等を活用するとともに、季節の移り変わりが分かる観察か所、学校の要請事項等を考えてポイントを選定して探検シートを作成する。	探検シートには必ず「驚いたこと、新しく発見したこと」等を記入できるようにしている。観察後のふりかえりの時間に生徒代表による発表を行っている。 なお、可能な限り五感で学び体験できるようなポイントを選定するように心がけている。 
1	工作 森から得られる小枝、木の実等の自然材料でネームプレート、森のくまさん、もっくん等の簡単な工作を行う。	自然材料を有効に使うことにより、森の楽しみ、面白さを体験させる。なお、団体学習のため危険なナイフや鋸は使用していない。 
1	森のお掃除 里山整備（森林整備）を体験したいとの学校からの要請により、小学生3年生には本格的な里山作りは難しく危険が伴うので、登山路（車道）沿いの森林の草刈（主としてササ）と枯れ木の林外持ち出しを体験させている。	草刈り、枯木の持ち出し後に森林が明るくなり、きれいになったことを生徒に説明して、花の咲く木や昆虫が増えることを教える。また、登山、ハイキングにくる人々が明るくなった森を見て、ほっとする様子を伝える。 

(4) プログラムでの連携内容 (①学校、②地域)		
①教員との打ち合わせで自然観察の内容、工作の種類、生徒の障害・アレルギーの程度等の健康状況を聞くと共に観察ルートの下見を必ず行い、観察ポイントの確認、安全確認等を行う。また、既に実施した環境体験学習の内容を聞き、観察内容等との調整を図っている。		
②県立公園内で行っているので地域との連携は特にありませんが、公園内で活動している他の団体や学習センターの職員等とは必要に応じて連携活動に取り組んでいます。		
(5) 活動の分析 (学習指導要領との関連または森林環境教育の視点) 上位3項目		
1 感性的	この学習の最大の目的は兵庫県では過去に悲しい事件が発生したことを契機に、自然の中に入り、自然体験を経験することにより自然に対する畏敬の念、命の大切さ・命のつながり、美しさに感動する豊かな心を持たせる。	
2 自然的	森林内に設置されているキツネの巣の模型、温度計等の施設を有効活用するとともに、樹木、昆虫や小動物の生態を観察するとともに、グミ類の実の試食、クサキの葉の匂いをかかせる等出来るだけ五感を働かせるように学び体験する。また、大きな池に渡来するカモに係わり、カモの習性、渡り鳥、エサやりの禁止等について解説し、野生動物の保護について学ぶ。	
3 多面的	森林の中にある大きな池（福島大池）の水はどこから来るのか、この水は何に使われているのか、人工林はどのようにして作られたのか等を指導し、森林と人とのかかわりについて学ぶ。	
教科	項目	学習内容
社会 3年	農業用水を知る	有馬富士公園の森林の中にある福島大池の水は、周辺の森から集まった水で、森の水源涵養機能を学ぶ。また、この水が下流の農業用水に利用されていることを学び、森林、水の大切さを学ぶ。
理科 3年	自然（森林）観察	自然・森の大切さ、面白さ、不思議さ、厳しさを学び、命の大切さ、繋がりを体験させる。
図工 3年	工作	森から得られる木の実、葉っぱ、小枝等の自然材料を用いて、簡単な工作を行い、森の楽しさ、創作の面白さを体験させる。
(6) 活動の分析 (資質・能力の視点)		
3 多面的	福島大池の水は、下流の農地を潤して豊かな農産物の収穫、美味しいお米や野菜を人々に供給していることを伝え、森や水の大切さを学び体験する。	
4 コミュニケーション 5 協力	自然観察の一つとしてオリエンテーリング型の自然観察を取り入れているが、10名程度の生徒の班を作り、地図と探検シートを持って、班長が中心になり、班員全員でポイントを探し、待機しているスタッフの案内を聞き、さらに次のポイントを探して移動する。この自然観察は班員が相談しながらポイントを探すコミュニケーションと弱い友を助けながら歩くこと等の協力心を育てることにつながっている。また、班長が班員の意見をまとめる能力を育てる。	
(7) 実施後、参加者の変化		
有馬富士公園の自然を学び体験することにより、小さな虫から大きな樹木すべてが命を持ち、一生懸命生きていること、さらに自分たちの住んでいる街や学校付近の自然と有馬富士公園の自然の違い知り、街の小さな命、自然でも大切に心が育てられていると考えます。 また、森は人だけでなく、多くの生物のために大事にして保護しなければならないこと学んでもらっていると思います。		

NPO 法人 キッピーフレンズ・環境体験学習ご案内



兵庫県立有馬富士公園



三田市有馬富士自然学習センター



新緑の森



カザグルマ

NPO 法人キッピーフレンズ案内

キッピーフレンズは平成 14 年 4 月に三田有馬富士学習センター展示交流員として設立、平成 18 年 7 月に特定非営利活動法人の認証を受け、翌年から学習センターの指定管理者に指名され、現在は第 3 期指定管理者として活動している。活動内容は施設管理、館者サービス業務、季節行事、環境学習、各種イベント等を行っている。会員数 50 名、年間イベント 220 件、年間来館者 11 万人

森の中に環境体験学習に適した施設が設置されており、学習効果を高めています。



スカイデッキ（高さ 5 m） きつねの模型のキツネノの巣 空中と地中の温度計

キッピーフレンズが行っている環境体験学習について

- *「環境体験学習」とは平成 19 年度から兵庫県内の全小学 3 年生が年間三日間、自然の中で「命の大切さ、繋がり」学び体験する環境体験事業
- *活動フィールドは兵庫県立有馬富士公園の森林、活動拠点は同公園内に設置している「三田市有馬富士自然学習センター」
- *実施しているプログラムは自然観察、水辺の生き物調査、森のお掃除、班の木調査、自然材料を使った工作等
- *自然観察は必ず「森の探検シート」を持って観察ポイントで学んだこと、発見した事、驚いたこと等を記入し、ふりかえりで発表します。
- *公園の森の中に、環境体験学習に適する施設が幾つかあり、学習の効果を高めています。
- *平成 26 年度は 13 校、平成 27 年度は 10 校を受託しています。

実施しているプログラム



自然観察



水辺の生き物調査



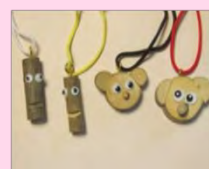
拡大スクリーン



森のお掃除



自然観察で持つ探検シート



学習で役に立つ看板

自然材料で作る工作

環境体験学習の成果等

- *子ども達は森林学習を通じて命の大切さ、自然の面白さ・厳しさを学び体験することにより自然を尊ぶ心を育むと共に、人間と自然、自然と社会の繋がりを知る機会になっていると思います。
- *学校を離れ初対面のスタッフからの指導は子ども達に少々緊張感を持たせますが、学校生活にない経験を与えています。
- *昆虫に触れない子どもが恐々ですがやっとタッチできるようになった時のうれしい顔を見ると、スタッフ活動の疲れも癒されます。

事例報告 H27-2

団体名： 京都森林インストラクター会（京都府）

プログラム名：京都市立金閣小学校での森林教室		
(1) プログラムの目標	・身近な自然に親しむ。 ・継続的に自然との関わりを持たせる。 ・児童の環境に対する意識を高める。	
(2) プログラムの概要	京都市立金閣小学校は、学校の西300mほどの位置に衣笠山があり、平成13年（2001年）から森林教室を行なっている。 当初は3年生が年に1回、自然観察をしていたが、平成15年（2003年）に「遊々の森」協定を締結したことにより、国有林内で巣箱かけやキノコの菌打ちをするなど活動の幅が広がっている。 4年生は平成17年（2005年）から、5年生は平成23年（2011年）から継続的に活動しており、3～5年生の間で段階的に詳しく衣笠山の自然を学んでいる。1学年の人数は、現在は80～85名。	
(3) プログラムの展開		
時間数	プログラムタイトル	
	活動内容	指導・支援の方法、ポイント等（教材等）
6	衣笠山「森林教室」 3年生の秋（11月） 身近な衣笠山をお弁当を持ってじっくり自然観察しながら歩く。学校に戻ってからは、山で拾ったドングリと落ち葉で工作。	現在は9班体制で児童を案内。各班の森林インストラクターができるだけ同じ内容を説明できるよう、必ず説明する内容を決めておく。児童の興味がどの辺りにあるのか、事前に質問をもらっている。学校へ帰ると山で拾った落ち葉で「こすり出し」とドングリのキーホルダーを作る。 
4	野鳥についての学習、巣箱かけ 3年生の冬（2月） 鳥の生態、鳥の巣について学習。巣箱かけ。 	各種野鳥を紹介。さえずり（鳴き声）も聞かせる。さらに鳥の身体的特徴や鳥の様々な巣について説明。 鳥の生態で学んだ鳥の特徴を思い出ししながら、木製の「鳥の表札」に鳥の絵を描き、巣箱に釘で打ち付ける。 1つの巣箱に3～5人で協力して木に取り付け。
4	衣笠山と人のかかわりⅠ 4年生の冬（1月） 衣笠山にはいくつかのタイプの森林があり、その特徴をスライドで説明。その後山に行き実際の森林を見ながら説明。また野生動物についても説明。	スライドによる学習の後、実際に衣笠山に行き現地でも説明。人が植えて育てている人工林、人の手が入っていないシイ林、人が利用してきたコナラ林やマツ林など、人との関わりを説明。野生動物については、食物連鎖を説明。
4	衣笠山と人のかかわりⅡ 5年生の冬（3月） 衣笠山と人との関わりをもう少し詳しく学んでいる。「水・土・木材」をテーマに森のはたらきを説明。	スライドによる学習の後、実際に衣笠山に行き現地でも説明。川を見ながら水をたくわえ、ゆっくり流すはたらき、木々の根が土砂の流出を防いでいるはたらき、木材生産や間伐についても説明。 
4	キノコの菌打ち 5年生の冬（3月）※4, 5年おきに実施 キノコ・菌類についてスライドで説明した後、ほだ木に菌打ちを実施し、衣笠山に設置。	キノコと菌類の役割などについてスライドで学習。 衣笠山で見つけた様々なキノコも紹介。京都府産のコナラなどに児童がドリルで穴を開け、種駒を菌打ち。菌打ちした木を持って、衣笠山のヒノキ林（国有林内）で伏せ込む。 

(4) プログラムでの連携内容 (①学校、②地域)

- ①金閣小学校は平成24年(2012年)に文科省の「スーパーエコスクール実証事業」に指定され、学校全体で環境学習を進めている。その活動の一環として、環境教育の一翼を3～5年生の森林教室が担っている。3年生の森林教室では、毎年先生と一緒に下見をし、事前授業をしてもらっている。そのおかげで、児童は森林インストラクターを信頼してくれているし、衣笠山の自然に対する興味が湧いている。私たちとしては、とても案内しやすい。
- ②フィールドである衣笠山には衣笠山国有林があり、森林管理事務所との連携により活動に取り組んでいる。具体的には、平成15年に金閣小学校と京都大阪森林管理事務所が「遊々の森」協定を締結。当会は近畿中国森林管理局からその技術指導を委嘱されている。「遊々の森」締結後、国有林内を利用して巣箱かけをしたり、菌打ちしたほだ木を設置したりと活動の幅が広がった。

(5) 活動の分析 (学習指導要領との関連または森林環境教育の視点) 上位3項目

2 自然的 特性	金閣小学校の児童は、1年生から先生と身近な衣笠山を何度も歩いているが、じっくり観察はしていない。3年生の森林教室では、よく歩いている衣笠山をじっくり観察すれば面白いものが色々あることを体感してもらっている。五感を使って観察し、衣笠山の動植物の生態について森林インストラクターが解説。
3 多面的 機能	4年生の森林教室では、衣笠山と人との関わりを学んでいる。具体的には、衣笠山にあるいくつかのタイプの森林をスライドで説明し、また衣笠山にいる野生動物についても説明。実際に衣笠山に行って現地でも説明。人が植えて育てている人工林、人の手が入っていないシイ林、人が利用してきたコナラ林やマツ林など、人との関わりを説明。野生動物については、食物連鎖を説明。
4 現状・ 課題	5年生の森林教室では、衣笠山と人との関わりをもう少し詳しく学んでいる。「水・土・木材」をテーマに森のはたらきを説明。水をたくわえ、ゆっくり流すはたらき、土の流出を木々の根が防いでいるはたらき、木材生産や間伐についても説明。また間伐がされていない人工林、「ナラ枯れ」や「マツ枯れ」による被害、シカの被害についてなど現状の問題点についても説明。

教科	項目	学習内容
理科	3年 身近な自然の観察	1年生から何度も歩いている身近な衣笠山の自然を3年生時に森林インストラクターの解説でじっくり観察。
社会	5年 森林資源のはたらき	5年生では、「水・土・木材」をテーマに森のはたらきを学ぶ。水をたくわえ、ゆっくり流すはたらき、土の流出を木々の根が防いでいるはたらき、木材生産や間伐についても学ぶ。
理科	4年 季節と生物	3年生の巣箱かけでは、野鳥が春に巣作りをして子育てをすること、春に渡ってくる野鳥や冬に渡ってくる野鳥がいることなど、野鳥と季節の関係について学ぶ。 4年生で巣箱を外す際、かけた巣箱に野鳥が巣作りをしなくても、昆虫や爬虫類など様々な生き物が巣作りをしていたり、冬期の越冬場所として隠れ家になっていることを学ぶ。

(6) 活動の分析 (資質・能力の視点)

3 多面的	赤い実がなぜ赤いか、そこにはいない野鳥の役割を感じ取る。何かが掘り返した地面を見てイノシシが食べ物を探していることや、それが原因で植物が枯れたり、また掘り返された地面で発芽する木々を想像させる。また、巣箱に営巣した鳥の卵を食べたヘビについて、食う食われるの関係があり、ヘビが悪者で鳥が被害者という関係だけでないことを説明。
4 コミュニ ケーション	森林教室では最後に振り返りの時間をとっている。今日のプログラム、衣笠山で感じたことなどを児童一人一人に意見を述べてもらう。山で感じることは一人一人違う。それを自分なりに表現すること、他児童の意見を聞くことでコミュニケーションを行う力を養うことにつながる。
5 他者と 協力	3年生の森林教室では、少し急な坂を登る。ある年、その急坂で少し遅れていた児童に気づかず、先頭を歩いていた私に「ちょっと待って、〇〇さんが遅れてる」と遅れている児童がいることを知らせてくれ、「〇〇さん、前に行き」と最後尾を歩いていた児童が遅れないよう配慮してくれた。また、山で見つけたエビフライ(リスの食痕)を後ろから来る班の児童にも見てもらえるよう、目立つ位置に置いておいた児童を別の児童が「見つける楽しみもある」と元あった状態に戻すよう促した。協力して歩き、皆が同じように観察できるよう協力する態度が見られた。

(7) 実施後、参加者の変化

- 実施後の振り返りや、後日いただいている作文より。
- ・「山にいただけで楽しかった。」
 - ・鳥が食べて糞をすることで運ばれる種があることを知り、生き物同士のつながりを実感していた。
 - ・特にキノコに興味を持つ児童が多い。指で押すと胞子を出すクチベニタケや独特の触り心地のノウタケなどあまり見かけないキノコが心に残る。
- 自然の面白さ、不思議さから、もっと面白いものを見つけたいとの感想があった。
- ・「山や自然に守られていることを実感した。」

京都森林インストラクター会

京都森林インストラクター会は、平成13年から京都市立金閣小学校の森林教室を、学校近くの衣笠山で行なっています。平成15年に学校と国有林により「遊々の森」協定がされてから、巣箱掛けやキノコ栽培など学習の幅が広がっています。現在では、3年生から5年生まで段階的に関連させながら内容を深めて学習しています。



金閣小学校での活動実施状況

学年	内容	年度	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27
3年	森林教室(自然観察)	10月	○														
	巣箱かけ	3月				○											
4年	巣箱かけ	3月			○												
	巣箱外し	2月					○										
	タイプ別森林観察	2月					○										
	キノコの菌打ち	3月								○							
5年	10周年記念植樹	3月											○				
	巣箱外し	3月				○											
	キノコの菌打ち	3月				○											
6年	季節ごとの観察・ゲーム別調査	3回/年								○							
	森と人のかかわり	-											○				
3年生の児童数			100	135	117	125	113	144	125	117	111	99	107	81	83	85	85
3年生合計			1,627														

↑「遊々の森」締結

- H13年から3年生の森林教室(自然観察)は継続。
- H15年に「遊々の森」協定を締結したことで、巣箱かけやキノコの菌打ちなどができるようになり国有林内で活動の幅が広がった。
- 巣箱かけはH15年のみ4年生が実施。H16年以降は3年生が実施。
- 4年生では1年前にかけた巣箱を外すついでに、衣笠山の自然をもう少し詳しく学習。
- キノコの菌打ちは、4.5年おきに実施。
- H23年から継続している5年生の「森と人のかかわり」では、森林の果たす役割や、私たちの生活との結びつきを学習。

京都森林インストラクター会

京都森林インストラクター会は、平成10年に京都府内の森林インストラクターなどにより設立されました。平成28年1月現在69名の会員により、森林内で行われる学校教育や市民への森林教室、企業の環境貢献活動支援など、年間60回程度の活動をしています。

森林環境教育活動



森林の役割を知り、楽しみを伝える



企業等の環境貢献活動を支援 (京都モデルフォレスト運動)



会員のスキルアップ



森林インストラクターとは、(社)全国森林レクリエーション協会が実施する資格試験に合格し、同協会に登録された「森林インストラクター」の資格を持つ人の称号です。

森を利用する一般の人に森林・林業についての知識を伝え、森林の案内や森林内での野外活動の指導者を育成し、森林の総合的な利用、山村と林業の活性化に役立つ活動をしています。

平成27年現在、全国で3,092名(京都府で66名)の森林インストラクターが登録されています。

事例報告 H27-3

団体名： 大山横手道上ブナを育成する会 （鳥取県）

プログラム名： 水と森の分校		
(1) プログラムの目標	地域環境のすばらしさに恵まれていながら、そのありがたさを分かっていない子供たちに、地元にある19.4万トン/日も湧き出ている水を通して、自然との関わりなどを学習して、すばらしい所に生まれたんだと誇りを持たせて、森を含めた自然は自分の宝なんだと気づかせたい。	
(2) プログラムの概要	校外学習は4回行うが、事前に学校で簡単な学習を済ませて心弾ませて出てきている。子供たちは年度ごとに変わるが10～18人ぐらいである。対応する私達指導員は5～6人と子供の数にしては沢山配置している。(2～3人は指導員教育もかねての出席である)指導員の役割で最も注意させていることは必要以上に説明をしないこと。子供たちが求めている所までしゃべり過ぎないことである。先ず、体で感じさせながら子供たちの言葉を誘導することである。(知っていることを全て教えようとする悪い傾向がある。)	
(3) プログラムの展開		
時間数	プログラムタイトル	
	活動内容	指導・支援の方法、ポイント等(教材等)
3.5	水の学習 湧水の源泉を探る 水の利用 浄水場の見学	子供たちの自主性を尊重しながら指導誘導する。 間違ったり、分からなかった時だけ助言する。 全て五感を通して体感させる。 
	森の学習 森の働きと役割 本物の森と人工林の比較 自然との対話能力にスイッチオン	学校の事前学習が特に必要。 人工林を歩かせ その後でブナの原生林すなわち本物の林に入りその違いを体感させる。 ブナの林で横になり、リラックスをさせてから森との対話、自分との対話を試みる。人数によっては班分けを変える 
3.5	木を植える学習 苗抜きと根の養生 木を植える 適地適木	通常の植林と違うことをしっかり説明。 苗木1.5～2m 植栽地は国立公園内の急勾配、石がごろごろ、積雪2m 過酷な所に、異常と思える苗木の植林、苗抜きと根の養生も全て自分たちでやらせる。苗木の運搬、道具の運搬も自分たちでやらせる。勿論穴掘りも 
	冬の森の学習 冬芽の観察 冬の動物たちの動き 冬のブナの林の観察	事前に冬芽と動物の足跡、糞の学習 スノーシューの装着技術を事前に出張教育併せて冬山の事前教育。 
0.5	まとめ 発表会	
	バスでの帰り時間を利用。時には子供たちと給食を食べながら。子供たちの感想と質問を受ける。	対話を通して評価している。 また、子供たちからの感想文を読み終えてから指導者で反省会を行い、今後の指導方法に反映させている。

(4) プログラムでの連携内容 (①学校、②地域)		
①事前に先生にコースを下見してもらうのが基本。前年のプログラムの内容と同じ時には 前年度の先輩たちの活動をビデオで学習してきてもらう。子供たちは興味を持ってやる気満々で参加してくる。		
(5) 活動の分析 (学習指導要領との関連または森林環境教育の視点) 上位3項目		
1 感性的	僅か400mの間で湧き出る水が19.4万トン/日、しかも年間を通じて11度の水の中に入り山の下から湧き出る水を5感で感じさせる。この水はどこから流れて来るかを話し合う。また、ブナの原生林では木の感触や木の様々なコケ模様に触れ、森の不思議さを探る。さらに、スポンジのようにふわふわの腐葉土に触らせこの役割を探る。 この腐葉土の上に子供たちを仰向けに寝かせながら、20分間の自然との対話と自分との対話を試みる。	
2 自然的	分厚い腐葉土の中に様々な形をした虫がうようよしている。目に見えない微生物も沢山いることも学習する。最初は気持ち悪がるが、むしろ彼らの方が迷惑がっていることを認識した頃から、気持ちが落ち着く。その後で腐葉土の上に寝そべっても 虫が体を這い回っても子供たちは騒がなくなる。子供たちを同じ森の仲間だと認めてくれたんだと教えてやる。 ここで、彼らの働きで1センチの腐葉土が出来るのには100年掛かることも学習する。	
3 多面的	水と森の関係を知ることによって、森林の大切さを学び、自分たちの身近な自然の中、どんな動物や植物があって、森林が守られている環境について考え、どう関わっていくかを考える。	
教科	項目	学習内容
4年 社会	地元を知る 「飲料水の確保、地元の主な産業の様子、特色のある地域の生活」	自分達の住んでいる地域について関心を持ち、それらを意欲的に調べることを通じて地域社会に対する誇りと愛情を育てる。 自然豊かな所で生活していながら、それに気付いていない所からのスタートである。私達が教えたことを家に帰って、家族に話をするを約束する。
4年 理科	生命・地球・季節と生物 「季節と生物」	生物を大切に作る態度を育て、動物や植物の成長と環境との関わりについての見方や考え方を持つことが出来るようにする。特に花、蝶、そして森の恵の山菜、きのこ などにも興味を持たせる。
道徳 特別活動	郷土愛・自然に親しみ	学校では自然体験や体験活動の事前調査、体験活動後のツール発表などの学習活動を積極的に取り入れてもらう。
(6) 活動の分析 (資質・能力の視点)		
3 多面的	源泉川や森の中に入り森林環境を守るために自分たちが出来ることを考える。	
5 協力	木を植える作業においてそれぞれが協力的になった。一つの穴を掘ることなどでも場所によっては石ころがごろごろ出てくる、木の根っこも出てくる。 おのずと皆で助け合っの作業になってくる。作業を通じて一本の木でも大事に植え、育てて欲しいという気持ちが出てくる。雪と雪ずれによる幹折れ対策に柴置きにも誰が植えたの関係なく必死で助け合っている。 子供たちの感想文ではツルハシを使っての穴掘り作業が最も助け合っの作業だったと書いている。	
7 進んで 参加	一般市民を対象にしたブナの植林体験にも 「水と森の分校」に出ていた子供が親子連れで参加しているのを見かける。	
(7) 実施後、参加者の変化		
・ 1回目の水の学習の時には11度の源泉に入り冷たくて泣き出す子供もいたが、その子供たちが回を増すごとにたくましくなっていくし、その交わす会話も様になってくる。もともとたくましい子供たちはどんどん頼もしくなってくるのが分かる。そして自分たちは自然豊かなすばらしい所に住んでいるんだと郷土愛が生まれてきている。 ・ 美味しい水、美味しい空気を作り出す森は大切なんだ。豊かなブナの森があるからなんだ。それに自分たちも関われるのを喜んでいる。必ず植えた木をいつまでも見守ることで話を終える。		

大山横手道上ブナを育成する会 「水と森の分校」

目標

自然との関わりなどを学習して、すばらしい所に生まれ
たと誇りを持たせて、森を含めた自然は自分の宝な
んだと気づかせたい。



大山ふれあいの森

植えよう、育てよう、ブナの森！



ブナの森はきれいな空気を作り、豊かな水を抱き、
私達の命を守ってくれています。私達は今、その森
の恩恵を受け、未来に渡していく途中にいます。
元気な森を育てて伝えていくために、**ブナの木**を
中心とした森づくり活動を推進しています。

大山横手道上ブナを育成する会
林野庁 鳥取森林管理署

◎水と森の分校

伯耆町立八郷小学校4年生 10～18人(別引率2名)
校外学習に協力 4回／年 (3～3.5時間／回)

- (1) 水の学習
- (2) 森の学習
- (3) 木を植える学習
- (4) 冬の森の学習

その他

森と水に親しむ学校 (共催: 米子地区少年健全育成指導員協会)

8月 小学生40名 保護者及び米子警察署、先生、指導員の総勢70名

水と森の分校のカリキュラム(1)～(3)を 6 時間で行う

ドイツ少年との交流 (環境学習会担当)

毎年 8月に行っている

森と水の分校 体験水

11度の湧き水

山の下から湧いてくる



400m間で湧いて、
19.4万トン／日



ふもとの米子の水は 日本一
19.4万トンの水で どんな量なの？

日本人 人／日 300Lの生活用水
60万人分に相当する。米子市、境港
市、の2.5日分

3

手入れの出来てない森 放置された森



草 1本ない

55

ブナの森へ

ブナ林の説明

腐葉土 1センチが100年

森の中の明るさ、その周りの植物、生きものの想像、腐葉土中の生物など

聴診器を当てて、
水の流れる音を聴きました



自然との対話能力
にスイッチを入れる
(5感能力の開発)



最後に給食を食べながら感想を語る



子供たち ミゾレの中で頑張っています



効果

- : 1学期終わりごろから子供たちに変化
「5感」と言う言葉を何の抵抗もなくすんなりと使い出す。
(1日コースの子供たちにはこんなところまで行かない)
- : 3回目のブナを植える体験林業の頃になると
見ても、話しても たくましくて頼もしくなっていくのが分かる。
- : 4年生を終えるときには感受性豊かな打てば響くような子供に成長している。
- : 森を含めた自然は自分の宝なんだと気づいて進級している。
- : 同じ学校で何年も続けていると、子供たちも、先生達も当に
「継続は力なり」と言う言葉どおり自力が付いてきている。
- : 「ふるさと八郷」、子供たちが作詞し、先生が作曲
評判がよくて学校内外でも歌われている。
- : 学校表彰 全日本学校関係緑化コンクール準特選
鳥取県美しいもりづくり功労者

特別: ブナを育成する会員のモチベーションアップにも
効果があった。

今後

学校と連携を密にしながら継続をしていく

森の学習に 今も残る胴回り3~6mもあるケヤキが乱立している里
山の見学を組み込みたい

学年を変えて

将来の水を守る方法を一緒に考えていきたい

世界の水事情の教育 机上教育

節水教育.....体験

日本人の生活用水の平均使用量は300L/日

ドイツ人の生活用水の平均使用量は100L/日

人間らしい生活をするために最低限必要な量は50L/日

1日100L/日の生活体験

水ジャーナリスト橋本淳司先生の指導で考えたい

事例報告 H27-4

団体名： 岡山県西粟倉村教育委員会（岡山県）

プログラム名：『村のすごい！』を見つけよう ふるさとを元気にするESDプログラム		
(1) プログラムの目標	西粟倉村は今“百年の森林構想”をもとにスギやヒノキの人工林を生かした持続可能な村づくりに全力で取り組んでいる。 本プログラムは、西粟倉村の人工林や天然林等の森林を中心に村の特色ある自然環境や人材を生かした体験活動を通して、子どもたちの生きる力・探究する力を育てるものである。村内外の子どもたちのために開発したプログラムである。	
(2) プログラムの概要	本プログラムは村の豊かな自然環境として、“天然林エリア” “人工林エリア” “沢エリア”を用意して子どもたちの自然体験の場としている。 また、“ふれあいグッズづくり”や“ふるさと元気給食”を通して地元の食材等や村の人と触れあう活動を提供する。 体験活動の後には、子どもたちが活動から学んだことを自分たちなりに表現しまとめる。そしてそれを元に子どもたちは村の人と交流し、お互いに学び合う活動を行う。 このように本プログラムでは、体験・表現・交流の場を設定し、それらを連動させる学びに特長がある。	
(3) プログラムの展開		
時間数	プログラムタイトル	
	活動内容	指導・支援の方法、ポイント等（教材等）
0.5	オリエンテーション 活動テーマを知らせる 各種体験活動、表現まとめ、発表・交流会の活動の流れを知らせる 活動に取り組むための子どもたちの心がまえ、諸注意を伝える	班編成はあらかじめ知らせておく 班で協力して可能な限り子どもたちの力で進める活動にしていこうと 特に野外活動時において、危険物箇所、水分補給等
	ふれあいグッズづくり 班ごとに村の人と一緒に簡単なものづくりを行う つくりながら子どもと村の人が自己紹介しあい交流する できあがった作品を紹介しあう	西粟倉村の間伐材の端材を使った ”森のかけら首かざり”をつくる 村の人がつくり方を教える 
0.75	ふるさと元気給食 西粟倉村で提供している”ふるさと元気給食”を参加者と給食食材の生産者、調理者が一緒に食べながら交流する	給食内の地元でとれた食材を紹介する 食材生産者が食材を育てる思い、子どもたちに対する思いを語る 
	天然林エリア（森林体験活動） 村の最北部にある若杉天然林（ブナ、ミズナラ、トチノキ等二百種類の樹木、多くの野鳥、沢にはイワナ）で班ごとに沢で遊んだり、森のおくりものビンゴ（五感ビンゴ）をおこなう	自然体験ボランティア（村の人）による見守り 子どもたちの必要があれば対応する 子どもたちが班ごとに自主的に散策したり、ゆったりと過ごしたりすることを大事にする 
1	人工林エリア（森林体験活動） 高性能林業機械を使ったスギやヒノキの間伐作業を見学する 一人ひとりがノコギリで間伐材の丸太切りや枝打ち体験をおこなう	安全管理に十分留意する ヘルメット着用 （機械見学时、体験作業時） 自然体験ボランティアや運営スタッフで人員を確保する 間伐作業の目的や機械化のメリットについて説明する 

時間数	プログラムタイトル	
	活動内容	指導・支援の方法、ポイント等（教材等）
1	沢エリア（森林体験活動）	
	天然林から人工林を流れる沢の中を班で助け合いながら歩く “百年の森林”に入り、五感を使い何かを感じたり見つけたりする体験をおこなう	安全管理に十分留意する ヘルメット着用 自然体験ボランティアや運営スタッフで人員を確保する 沢歩きコース設定、水量等を事前に十分把握しておく 樹齢70年のスギ林で木に触ったり、においをかいだり年輪を数えたりする体験を大切に 
1.5	まとめ資料づくり + 練習	
	班ごとに各自が見つけた”村のすごい”を出し合い、その中から一つを決め、写真を選び、キャッチコピー（見出し）を考え、1枚の模造紙にまとめ、発表・交流会で1分間プレゼンができるように練習する	できるだけ子どもたち自身でまとめができるように大人は見守る 各体験エリアで各班ごとにデジカメですごいを保存 模造紙、紙、マジック、糊、ハサミ等は用意 資料ができた班から発表に向け練習をおこなう
1	発表・交流会	
	見つけた”村のすごい”を発表交流しよう 各班ごとに1分間プレゼン 各班ごとにポスターセッション 村の人と交流	発表交流会は、プログラムの参加者、スタッフ、ボランティア（村の人）及び自由参加の村の人である ポスターセッションで村の人と子どもたちが自由に交流する時間を確保する 交流会の全員で意見交換をおこなう 
0.5	活動をふり返って	
	活動全体をふり返って 自分が学んだこと成長したことをふり返り話し合う	体験活動で感じたこと見つけたこと 班で友だちと活動して思ったこと 活動の前で自分が成長したこと等について出し合う
（４）プログラムでの連携内容（①学校、②地域）		
①本プログラムのベースは、西栗倉小学校で行われている”ふるさと元気学習”である。この学習はふるさとの自然や人と触れ合い、子どもたちの生きる力・学ぶ力を高め、ふるさとを元気にしていくものである。また、体験・表現・交流の場を設定しそれらを連動させるものである。 このようなふるさと元気学習の方法を用いて、西栗倉村の自然環境や人材を生かすプログラムとして開発した。本プログラムを構成する小プログラムは単体としても実行することができる。必要に応じて、小学校の子どもたちの学習プログラムとして活用することが可能である。 ②本プログラムを実行するために、ボランティアとして以下の通り地域の人々と連携した。 ふれあいボランティア： ”ふれあいグッズづくり”で首かざりをつくる際に、参加者に作り方を教える役割を担う 自然体験ボランティア： 参加者が森林体験活動を行う際、活動を見守り励まし必要に応じて対処する役割を担う 給食食材提供者： ふるさと元気給食を参加者と一緒に食べながら、食材を育てる思い子どもたちへの思いを語る		
（５）活動の分析（学習指導要領との関連または森林環境教育の視点） 上位3項目		
1 感性的	天然林エリアでは、森のおくりものビンゴ（五感ビンゴ）での活動を通して、視覚、聴覚、触覚、嗅覚を通して天然林と触れ合い楽しむ経験を行うことができる。また、沢エリアでは、実際に沢の中に入り沢の中を歩きながら、その楽しさや怖さを体験する。子どもたちからは「沢歩きは遊園地よりも楽しい！」という返事が返ってくる。	
3 多面的	天然林と人工林、また沢の三者を一度に体験することで、人と自然との関わり方の違いを比較しながら体験を通して学ぶことができる。すなわち、天然林では人が手を付けない自然のままの大事さ、人工林では人が手を入れて管理することの大事さ、そして沢では楽しみとしての森林の体験である。	
4 管理維持	人工林エリアでは、人が植林した森林を大事に管理していくことの大事さや苦労・工夫について体験を通して学ぶことができる。具体的には、大型林業機械での間伐作業の見学や実際にノコギリをつかった枝打ちや間伐体験である。	
教科	項目	学習内容
総合的な学習の時間	探究的な学習	課題を持ち、体験を通して情報を収集・分析し・まとめ表現して交流するという探究する学習の方法を学ぶ
5年 社会科	森林資源の働き	森林資源の持つ機能や働き、また地域の人々の生活や仕事を通じた関わりを、体験を通して学ぶ
4年 理科	生命・地球・季節と生物	季節ごとに動物や植物の変化の様子を調べ、それらの活動と環境との関わりについて、体験を通して考える

(6) 活動の分析 (資質・能力の視点)	
3 多面的	森林の一部の側面だけを体験するのではなく様々な森林での体験活動が、森林の持つ多面的な機能を知るきっかけになる。具体的に天然林エリアでは生物多様性保全機能、水源涵養機能について、人工林エリアでは物質生産機能について、沢エリアでは保健・レクリエーション機能についてなど、体験的に多面的・総合的なものの見方や考え方を育む機会を提供することができる。
4・5 コミュニケーション・協力	体験―表現―交流の場を設定する本プログラムは、子どもたちがチームを組み、協力して村での自然体験を行い、チームで協力して自分たちの考えをまとめ、村の人と発表・交流する活動を行うものである。子どもたち同士のコミュニケーションや協力なしに活動は成立しない。また村の人とコミュニケーションをはかりお互いに学び合うことでさらに学びを深め発展させることができる。
6 つながりを尊重	本プログラには、様々な機能を持つ森林（天然林、人工林、沢）や人と自然との関わり（間伐体験、木工体験、ふるさと元気給食）、人と人の関わり（チームでの交流、食材生産者との交流、村の人との交流）を含んでいる。これらは、個々に分断された存在ではなくお互いに関連し合い影響を及ぼし合っている。本プログラムは、人やもののつながりについて考え、それを尊重する態度を育てる機会を提供することができると思う。
(7) 実施後、参加者の変化	
参加した子どもたちは ・人と話すのが苦手だったけど、初めて出会う人でも仲良く活動することができた。 ・先生たちがいなくても、みんなと協力して団結することが大切だと思った。最後までやりぬくことができ、自信になった。 ・森を大切に森を愛する気持ちは、全国の人々といっしょなんだということがわかった。 また参加した大人は ・アクティブラーニングを取り入れた学習が参考になった。 ・活動に地域の人々が大勢関わっていたことが参考になった。	



森とともに生きる村の



- 1 ふるさと元気学習の概要
- 2 学校として子どもたちに育てたい力を定める
- 3 学力を高めるための戦略
- 4 三層構造の学びの場とカリキュラム構成
- 5 子どもたちは、ふるさと元気学習から何を学んでいるか

モリーだよ。
森を愛っばいっばい
にするよ。



ボットンだよ。
きれいな水を流る
ことができたよ。



スギ丸だよ。
村を災害から守っている。
枝打ちが得意だよ。



岡山 西栗倉村立西栗倉小学校

1 ふるさと元気学習の概要

○ふるさと元気学習で
行っている主な活動

- ・体験活動
森での自然体験
ものづくり
- ・表現活動
ものづくり
新聞・パンフレット ポスター
企画書 報告書
- ・交流活動
校内の子どもたち
地域の人々
他地域の学校
全国の学校
- ・ふるさと元気給食



岡山県西栗倉村 教育委員会 西栗倉小学校

○ 森とともに生きる村と西栗倉小学校



1 ふるさと元気学習の概要 2

○子どもの生きる力・学ぶ力
(人間力)を育てる



☆ふるさとを元気にすることが
学習のゴール

☆体験－表現－交流の
三層が連動する学びの場



岡山県西栗倉村 教育委員会 西栗倉小学校

(1)具体例「ふるさと元気グッズづくり

1 ふるさと元気学習とは

活動の様子

間伐体験 5年生



(1)具体例「ふるさと元気グッズづくり

1 ふるさと元気学習とは

活動の様子 その2 元気グッズを全校でつくろう



(1)具体例「ふるさと元気グッズづくり

1 ふるさと元気学習とは

活動の様子 その1

元気グッズの企画書をつくろう



(1)具体例「ふるさと元気グッズづくり

1 ふるさと元気学習とは

活動の様子 その3 元気グッズを配布しよう



事例報告 H27-6

団体名： 特定非営利活動法人 とよなか市民環境会議アジェンダ21 (大阪府)

プログラム名： 世界・自然・豊中を学ぼう！ ぴったんこ隊		
(1) プログラムの目標	小学1～4年生を対象にした、全5～7回の連続講座。年2期（各期20人）。学びをサポートする大学生、環境教育プログラム作りに精通したスタッフで運営し、子どもたちと学生（大阪大学環境サークル）の両者を複層的、相互的に育成することを目的としている。 子どもたちは「食べ物」「水」「森林」などの各テーマを実践やワークショップ中で体験し、自分とのつながりを感じ、多様な子どもたちとみんなで考える力を伸ばす。 一方、大学生は、各テーマを子どもたちに「伝える力」「共に考える場を作る力」「見守り、育てる力」を実践の中で得ていく。また、大学生には子どもを教える対象としてではなく、子どもからも学ぶという姿勢を伝え、知識や経験が十分でなくても、相互に学び合えることを体感してもらう。	
(2) プログラムの概要	6回の講座のうち、森林とかかわりがある「動物」に焦点を当てた講座を2時間、「森林」をフィールドにした講座を1日（7時間）、森林からの恩恵の理解を深める「水」をテーマにした講座を4時間行った。 1日目はセンター内で 2日目は、豊中市立青少年自然の家（森林）に出かけ、室内で森林の現状を知る人形劇を見た後、森林の中で葉っぱを探すゲームや森林の探検を行った。その後、森林整備として、下草や木の間伐を行った。 3日目は、別日に世界の水の問題を知り、その後の講座として、私たちの生活水と水のろ過実験を行った。森林が水をろ過してくれることを、実験を通して、伝えた。	
(3) プログラムの展開		
時間数	プログラムタイトル	
	活動内容	指導・支援の方法、ポイント等（教材等）
2 (1日目)	ドイツのゲームで動物博士 「動物」の特徴を当てるゲームを行い。豊中にある動物クイズをした後、ゲーム用に個人で豊中の動物の絵と特徴を書き、それを使って、さらにゲームをした。	遊びながら、生物を見る様々な視点があることに気づいてもらう。動物の特徴を正しく覚えることにこだわるのではなく、特徴を考えながら、動物に興味を持つことを大切にする。わからないことを友達と一緒に想像し、話合う。 
0.5 (2日目)	森のお話（人形劇） キャラクター（タヌキとレッサーパンダ）を使った日本と世界の森の現状を知る人形劇 ※大学生企画・運営	森林から受けている恩恵、世界の森林と日本の森林の違い、人工林と天然林の違い、木材の輸入の自由化で放置された日本の山について、キャラクターを使って、人形劇で伝える。劇の後、子どもたちにどんな話だったか、どう思ったかを質問して、内容をより深める。 
1.5 (2日目)	葉っぱ探検隊、生き物探し お題の葉っぱを探すゲーム、生き物のフィールドサインを探す ※豊中市立青少年自然の家の職員担当	お題と同じ葉っぱを探すことで、よく見る力や探す楽しさを感じた後、前回の動物を思い出しながら、どんな特徴の動物が、どんなフィールドサインを残したか探す。 季節的に前回の講座の動物（哺乳類や爬虫類）に出会うことは難しいが、前回考えた動物とその動物がすんでいる森とがつながるような声掛けをする。 
2 (2日目)	きこり体験（森の整備体験） のこぎりを使って、下草や細い木などを切っていく ※豊中市立青少年自然の家の職員担当	この作業が朝に聞いたタヌキの話とつながっていて、森を守るために行っていることを、作業の前後に伝え、作業の意味を子どもたちの中に残すようにする。 
1 (3日目)	お水のお話（ろ過実験） 竹炭を使った水のろ過実験とお話 ※大学生企画・運営	水をきれいにする話をした後、ろ過実験を行う。このろ過が自然で行われているところが、森であることを子どもたちに気づいてもらう。 



(4) プログラムでの連携内容 (①学校、②地域)		
①参加者を集めるための広報において、対象者への配布をお願いしている。 内容においては、連携ではなく、あえて学校では教えていない視点や学校では取り上げにくく方法をプログラムに入れることで、学校教育と差別化し、学校とは違った地域での学びの場の提供という位置づけにしている。		
②大阪大学環境サークルG E S C (ゲックス) 環境教育班と連携し、講座の企画、毎回の運営を行っている。 フィールドにおいても、豊中市立青少年自然の家に協力していただき、こちらの目的と作業やゲームのすり合わせを行った。各期、数回は環境とは直接関係がないように見える専門家(例えば、ドイツのゲームの日はおもちゃコンサルタントの方)に協力いただき、なかなか取り上げられない手法や切り口で、オリジナルのプログラムを作って、実施している。		
(5) 活動の分析 (学習指導要領との関連または森林環境教育の視点) 上位3項目		
4 現状・課題	人形劇やきこり体験(森の整備体験)を通して、何が課題で自分たちは何ができるのか、体験を通して、学ぶ。 大学生には、今の日本と世界の森林の現状について、善悪ではなく、どう分かりやすく子どもたちに伝えるかを工夫する中で、森林の課題について、自らで深めてもらう。	
3 多面的	私たちが様々な形で、森林から恩恵を受けていることを、人形劇や水のろ過実験を通して、わかりやすく、記憶に残る体験を通して、学ぶ。	
2 自然的	室内で子どもたちの興味をひく「動物」を題材にした遊びと、実際に森の中で葉っぱや生き物を探すことで、五感を使って楽しみながら自然を感じると共に、身近で興味があると感じられるものと森という子どもたちには少し離れているように感じる場所とを結びつける。	
教科	項目	学習内容
		特に関連付けて、教えていない。また、異年齢を対象にしているので、習ったかどうかの配慮はするが、関連付ける必要性を感じていない。
(6) 活動の分析 (資質・能力の視点)		
6 つながり	連続講座で皆勤率が高いぴったんこ隊では、「森林」のことについても、森林をテーマとする日に学びを限定するのではなく、複数回、様々な側面で学ぶことで、自分の生活と森林がつながっている(ぴったんこしている)ことに気づくような、声掛けを心がけた。	
5 協力	約20人を4班に分けて、グループを作るとき、異年齢、他地域の子どもたちで構成し、グループワークも頻繁に行った。森林のゲームや作業では、お互い助け合ったり、年下の子や苦手な子を助ける姿も見られた。また、意見が違ふことは悪いことではないが、その中でどのようにみんなで話し合い合意をしたり、自分の気持ちを持っていくかは大学生がきめ細かな対応や声掛けを行った。環境問題において、ステークホルダーの対立はよくある事なので、子どものころから、対立を回避するのではなく、対立にどう向き合い、合意を得ていくかを体験することは大切である。リーダー内でもそれについて話をし、長期的な視点で子どもたちを育むことについて、考えながら、プログラムを進行している。	
3 多面的	プログラムの中では、私たちが考える善悪の価値について、子どもたちにできるだけ、発言しないようにしている。事実を伝え、それに対してどう考え、どう思うかは子どもたちにゆだねている。また、一方向しか見えていないような発言があれば、リーダーたちが違う見方を促したり、自分たちで考え、自分たちで決める体験を多く入れている。	
(7) 実施後、参加者の変化		
・ 日常で使う紙や水が森とつながっているということを認識し、無駄づかいしている友達に、注意するような場面が見受けられた。 ・ 異年齢や地域が違う子たちと話し合いをする中で、自分の意見が言えるようになったり、ぶつかり合うような場面でも、リーダーが誘導しなくても、見守るだけで、自分たちで考えて答えを出すことができるようになってきた。 ・ 大学生は、最初、ぴったんこ隊のお手伝いという立場だったが、段々と運営側の意識が芽生え、プログラムを運営、作る中で、失敗し、悩みながら、子どもとの接し方や伝え方の手法を学んでいる。 毎回のプログラムを終えた後の振り返りの発言が、短期的な視点から、次のプログラムにどうつなげるか、子どもの気づきを促すためにどうするかという長期的な視点に変化した。		

子どもと大学生が共に学ぶ

ぴったんこ隊



全5～7回の子ども対象のESD連続講座。各回「食べ物」「水」「森林」などのテーマを取り上げ、室内やフィールドでの活動。それぞれのつながりが回を重ねる毎に、より理解できるプログラム。「ぴったんこ」を体験の意味で使用。

環境交流センター(室内)

わっぱるの森(フィールド)

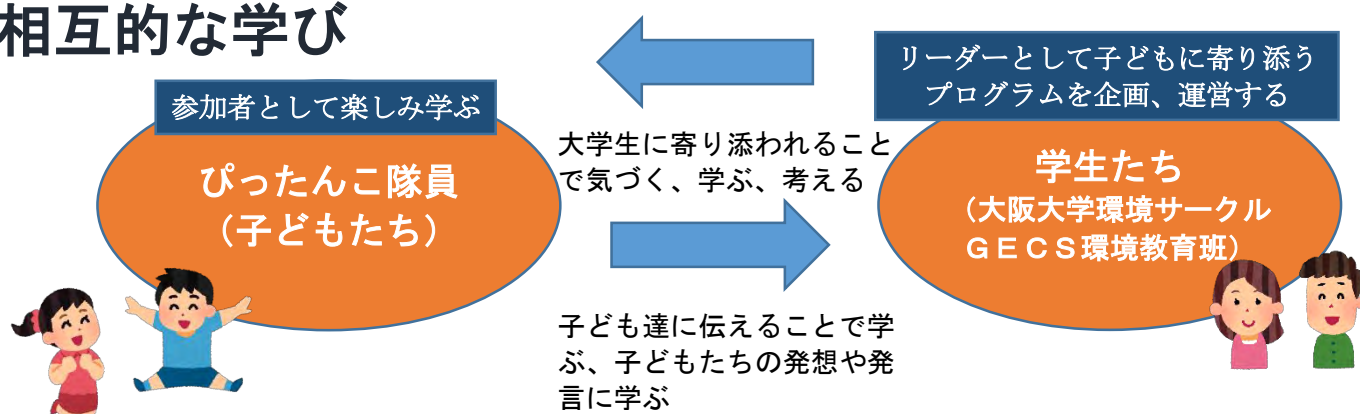


ゲーム、クイズ、ワークショップ、実験などを通して、グループや個人で学びを深めます。



ゲーム、人形劇、自然観察、森林管理作業などを通して、みんなと協力しながら学びを深めます。

相互的な学び



大切にしていること

- テーマに対して、善悪の価値判断を伝えないこと
- 学び合いの精神 (子どもからも学ぶ)
- 保護者にも意義を伝えること(家の学びにつなげる)
- それぞれの子ども、学生に寄り添うこと

豊中市立環境交流センター (指定管理者: NPO 法人とよなか市民環境会議アジェンダ 21)
豊中市中桜塚 1-24-20 TEL 06-6844-8611 FAX 06-6844-8668 E-mail office@kankyokoryu.jp

事例報告 H27-7

団体名： 特定非営利活動法人 クワガタ探検隊 (大阪府)

プログラム名： 育て！大都市の森・箕面国立自然林の守り人		
(1) プログラムの目標	持続的な「自然原体験活動」を通して、太古からの「生命の営み」を五感で体感し、自発的に森林にかかわろうとする『未来の森の守り人』を育成する。	
(2) プログラムの概要	①” 四季変化” を体感できる「森林探検活動」 ②” 夏休み” を活用した「カブト虫里親飼育活動」（各家庭で増殖後、自然に帰す） ③” 創作森林昆虫紙芝居” の上演による「読み聞かせ活動」 ④” 子どもスタッフ” による観光客への「自然ガイド活動」	
(3) プログラムの展開		
時間数	プログラムタイトル	
	活動内容	指導・支援の方法、ポイント等（教材等）
2	「森林探検活動」 身近な森林地域（公園など）を探検する。 （花さがし、クワガタ虫探し、ドングル拾いなど）	<理科> ・「自然観察での注意事項」を指導する ・森林内では「班行動」をさせる ・「五感」をフル活用して、自然を体感させる
	「カブト虫里親飼育活動」 夏休み期間中「カブト虫の♀飼育・産卵・幼虫増殖活動」を、各家庭で協力して行う。 	<理科> ・各家庭での「飼育許可」を受けておく ・「正しい飼育方法」を指導する ・「飼育セット」（虫・容器・エサ等）を準備する ・9月には「増殖幼虫」を回収して自然飼育する
1	「読み聞かせ活動」 創作紙芝居「帰って来～い！王者くん」の読み聞かせ会を実施する。	<道徳> ・「創作紙芝居（カブト虫編）」を用意 ・上記の紙芝居は「DVD版」でもよい ・子どもたちの「感想文」を紹介する （「創作DVD版」を希望学校に贈呈します！） 
	「自然ガイド活動」 子どもが「ガイド役」となる「自然ガイド（箕面の森など）」を行う。	<理科> ・場所は「人々が多く集まる場所（モミジの頃の箕面滝道など）」で実施する ・安全のため「保護者同伴案内」とする ・事前に「自然ガイドのしおり」を作成しておく 
1	「発表会」 森林ESDの年間活動総括のための「発表会」を行う。	<総合> ・月例の「参観日」や「校内学習発表会」などを利用する ・写真や活動ビデオ等の情報機器も使う
	(4) プログラムでの連携内容（①学校、②地域）	
①教員でもあり、小学校での理科を教えながら、『出前授業』（講師と教材セットを持ち込み）を実践している。しかし、なかなか多くの学校で取り入れてもらえるところまではしていない。 また、学校現場は、「多量の学習内容と指導の難しい児童の対応」で、多忙です。		
②「池田市の五月山グリーンエコー（植樹）」、「猪名川ネットワーク（ゴミ拾い）」、「地域コミュニティ（カブト虫里親飼育）」などで、地域との連携を図っています。 身近な地元から、『未来の森の守り人』を育成しています。		

(5) 活動の分析 (学習指導要領との関連または森林環境教育の視点) 上位3項目		
1 感性的	五感(目・耳・鼻・舌・手ざわり)を使っての「自然体感の方法」で自然を感じとる。 (特に、視覚の働きにくい「夜のカブト虫探検」などは、効果的です)	
2 自然的	子どもたちが「強い興味・関心を示すカブト虫・クワガタ虫」に『視点をしぼりこむ』ことが大切です。視点を集中させないと「単なるあそび」になる。 その上、現代っ子は「自然遊び」の経験にも乏しい。できない。	
4 現状	情報化(映像・ゲーム機)社会で育つ子どもたちを「自然につれ出すこと」は、不可能に近い。まずは、各家庭協力による『カブト虫里親飼育活動』から始めるべきである!	
教科	項目	学習内容
4年 理科	季節と生物	家庭で協力して「カブト虫飼育増殖学習」を通して、生命体の”死の悲しみと生命継承の喜び”を知る。
4年 道徳	多様な生き方	森林には、多様な生態の生きものが「棲み分け」をして生きていることを「読み聞かせ」学習を通して知る。
4年 総合	誇り	小さな「自然案内実践」を通して、『森林の大切さを人々に伝える誇りと苦労』を知る。
(6) 活動の分析 (資質・能力の視点)		
2 未来像	大人にもできない「森林の未来像」を子どもたちに押しつけることはできない。 子どもたちには、『数ヶ月後、”たくさんのカブト虫赤ちゃんを育てよう!”』の”持続的飼育体験をととしての未来予想”を体験させるしかない。	
6 つながり	紙芝居等の「読み聞かせ会」を通して、『自然生命は、”つながりの中で生き抜いてきた事実”』を考えさせる力が身につく。	
7 進んで参加	単に「自然探検会」に参加するだけでは不十分 『子ども隊主催の自然ガイド会』などの自発的活動を通してこそ『未来の森の守り人』が育つ。	
(7) 実施後、参加者の変化		
・日本古来からの継承されてきた自然観「共生・畏敬・感謝」に基づく自然体験は、多くの参加者に感動を与えていることは確実です。 ・「子どもを主役にした自然体験活動」に重点を置いた森林ESDこそ、”未来の森の守り人”に誇りと勇気を与えています。		

NPOクワガタ探検隊の活動

かぶと虫里親活動



創作自然絵本の読み聞かせ活動



秋の箕面大滝道での自然ガイド活動



NPOクワガタ探検隊へようこそ!
※結成から20周年:230回の活動実績を誇る!

●創作絵本:1巻~10巻の贈呈活動

☆活動の基調は、
日本里山の自然観:

共生・畏敬・感謝の心

●四季の自然探検活動!
●カブト虫・クワガタ虫の里親活動!
●創作紙芝居の読み語り活動!
●原生林のボランティアガイド活動!
●イベント出店活動!

『入隊申込み』

お名前: _____
ご住所: 千 _____
ご連絡: _____

事務局: TEL/FAX 072-753-8327

箕面滝道 自然ガイド

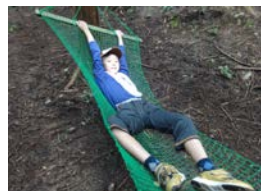
原始の森は、
命の古里!

〈本道〉〈洞窟〉
〈森の昆虫館〉
〈木の橋〉
〈清流の歌舞台〉
〈清流の歌舞台〉
〈清流の歌舞台〉

NPOクワガタ探検隊 67

事例報告 H27-8

団体名： 特定非営利活動法人 イー・ピーイング (大阪府)

プログラム名： 「森の体験」「森まなび塾」による森林ESD		
(1) プログラムの目標	小学生とその保護者をはじめとする幅広い都市住民を対象に、森林がもたらしてくれている様々な恩恵を知り、保全の重要性を知って体験し、積極的に楽しむ機会を提供することから、森林資源の働き及び自然災害の防止の役割、自然の偉大さを知り自然環境を大切にすることを理解する。	
(2) プログラムの概要	森の体験。 大阪府内や奈良県吉野町の森林をフィールドに、①森について学ぶセミナー ②森林保全活動や自然観察会 ③森林を楽しむ森林セラピーやウォーキングを組み合わせたプログラムを実施 2014年6月～2015年1月に5回のセミナー＆活動体験と1回のシンポジウムを開催。 参加者延約230名 活動場所 紀泉わいわい村の里山、河内長野市滝畑ダムと岩湧の森、奈良県吉野町、大東市飯盛山や野外活動センター、河内長野市林業関連施設など、大阪市内 など 森まなび塾。 奈良県吉野町の森林をフィールドに、①森について学ぶセミナー ②森林保全活動や自然観察会 ③森林を楽しむ森林セラピーやウォーキングを組み合わせたプログラムを実施 2014年9月、11月、2015年9月に3回のセミナー＆活動体験 参加者延約70名 活動場所 奈良県吉野町	
(3) プログラムの展開		
時間数	プログラムタイトル	
	活動内容	指導・支援の方法、ポイント等（教材等）
各1H	①森について学ぶセミナー 「森の役わりを知ろう～森林が守る生物多様性～」 「地球温暖化と異常気象」 「河内長野の水源地の森」 「吉野の森を知る・楽しむ・つながる」 「森の木が住宅になるまで」 「大阪市内の国産材活用」 「吉野の森の特徴と守ることの大切さについて」 「吉野の原木～製材～住宅を知ろう」 「森のめぐみのご紹介～森林が育んだおいしいものや文化遺産について～」 「日本のもりと水と空気を守る～普段の買い物を通して環境貢献～」 など	都市生活で自然と触れ合う機会が少ない人々に、きれいな水・空気の提供をはじめとする森林がもたらしてくれている様々な恩恵を伝え、都市生活の中での環境貢献にはどのような手段があるのかを具体的に伝える。 例えば、国産材を住宅・内装・家具などで使う。カーボン・オフセット商品・サービスを選ぶ。省エネ・節電などを実践する。森林に出かけて楽しむ。など   
各2～3H	②森林保全活動や自然観察 「夜の森、朝の森の自然観察」「水源の森自然観察」「川上村250年の森訪問」「生駒花屏風ハイキングでの植樹」「河内長野での間伐体験」「2009年の広葉樹植林地での下草刈り」「奥千本桜の植樹の準備活動」など	森林保全の重要性を知って体験し、積極的に楽しむ機会を提供する。 間伐・草刈・植林などの直接的な活動だけでなく、自然や保全された森林の魅力を知り、体験し、多くの人に伝え、今後も機会を見つけて訪れて楽しむことも、自然環境を大切にすることである、と伝える。  
各2～3H	③森林を楽しむ森林セラピーやウォーキング 「水源の森ウォーキング」「森林セラピー体験」「森林ウォーキング」「吉野松シートを使ったキャンドルホルダー作り」「間伐材のウッドシェイカーづくり」「ネイチャージゲーム」など	自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切にすることが気持ちを再確認する。 自然体験や森林保全のボランティア活動、楽しいものづくり体験を通じて、森林の楽しさ、素晴らしさを伝える。  

(4) プログラムでの連携内容 (①学校、②地域)		
②セミナーも体験活動についても、実施する地域の方(行政の担当者、森林組合など)にヒアリングを行った。 ヒアリング内容は、森林や生物多様性におけるその地域の特色、保全や保護の状況、セミナーで紹介すべきポイント、体験活動に取り入れるべき内容など。 プログラムについて具体的な提案をいただいたので、活動全体がより充実した内容になった。 日頃から森林保全や自然保護に携わっている方ならではの、アドバイスや体験活動のおススメやポイントなど、貴重な情報を得られた。		
(5) 活動の分析(学習指導要領との関連または森林環境教育の視点) 上位3項目		
1 感性的	森林保全活動や自然観察、森林ウォーキングでは、木の幹や枝・葉などの感触や森の景色、土がふかふかしていること、谷間の風を感じたり、鳥の鳴き声に聴き入ったり、普段の生活では体験できない、五感で感じる体験ができる。	
2 自然的	昆虫やへび、カニなどの発見、葉・花や樹液の匂い、いろいろな動物の糞や荒らした跡、樹皮をかじる鹿被害などの観察から自然や命しくみや不思議さを学ぶ。	
3 多面的	都市生活での空気やおいしい水は森林がもたらしてくれること、材木、食物の多くなども森林が育ててくれていること、レクリエーションの場となり、精神的な安らぎや活力をもたらしてくれるのも森林であることなどを学ぶ。	
教科	項目	学習内容
道徳	自他の生命の尊重、自然の偉大さを知り自然環境を大切にすること、美しいものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ心	森林の多面的な機能をはじめとする自然の偉大さを知り、自然環境を大切にする。 保全の行き届いた森林、昆虫や植物といった自然の造形など美しいものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ。
総合 特別活動	横断的・総合的な学習、探求的な学	森林保全活動や自然に触れる体験を通じて、森林の重要性や大切に感じ愛おしむ気持ちを育む。
理科 6年生	生物の環境	生物は、水及び空気を通して周囲の環境とかかわって生きていること、人間は全ての生物の恩恵によって生きていることを理解する。
(6) 活動の分析(資質・能力の視点)		
3 多面的	森林の多面的な機能をセミナーで理解し、体験活動を通じて体感・実感し、今後森林環境を守るために自分たちができることを考えるなど、自然との関係を考えるきっかけとなった。	
6 つながり	みんなつながっている。 都市生活と森林のつながり、一人一人の人間の営みと地球温暖化の関係、全ての環境問題がつながっていることを、セミナーや体験を通じて理解した。	
7 参加	地球規模の環境問題に対しても、一人一人の活動の積み重ねによって貢献することができること。 大切にしたい気持ちや楽しい体験を通じて、森林保全を始めとする環境問題に積極的にに関わり、参加する気持ちを育んだ。	
(7) 実施後、参加者の変化		
参加者からのメッセージの一部 ・自然がいろいろとつながって人間の暮らしに役立っているとわかりました。(小学生) ・大きな木も小さな花もカニの出産も命をつなげているのが健気に感じました。人間は他の生き物に謙虚であるべきですね。 ・虫にいっぱいあえた。虫にさわれた。(幼児 保護者聞き書き) ・山が都市の水を守ってくれていると改めて実感しました。 ・人の手によってつくられた森が多くあること、そして守っていくことの意義、木を使い続けることが、CO2を貯蔵している点で役立つこと、文化的価値を森林から受けていることも知った。 ・セミナーを聴いてからのウォーキングは森林を見る目が違いました ・250年の森、杉を手のひらで触った感触はすばらしかった などのように、森林に触れることで都市生活では触れることが少ない自然へのおどろきや不思議さなどを感じ、保全の大切さへの実感や自然に対する認識がたかまった。		

森の体験。森まなび塾。

都市住民のための森とつながるセミナー&活動体験

特定非営利活動法人 イー・ビーイング



お問い合わせ イー・ビーイングまで

〒559-0034 大阪市住之江区南港北 2-1-10 ATC ビル ITM 棟 11F 西

TEL : 06-6614-1731 FAX : 06-6614-1801 イー・ビーイング←検索



事例報告 H27-9

団体名： 極楽橋森林整備プロジェクト実行委員会 (和歌山県)

プログラム名： 「世界遺産・高野山」 極楽橋の森人(もりんちゅ)		
(1) プログラムの目標	「世界遺産・高野山」の玄関口にふさわしい景観作りの大切さを知ること	
(2) プログラムの概要	イロハモミジの植樹スポットを数ブロックに分けて班分けをする 長カマの使い方を学習し、下草刈りを体験する 国有林の間伐材を使用した木材加工体験を実施する 「世界遺産・高野山」までの参詣道を歩く	
(3) プログラムの展開		
時間数	プログラムタイトル	
	活動内容	指導・支援の方法、ポイント等（教材等）
0.5	「世界遺産・高野山」 極楽橋の森人(もりんちゅ)の実施準備	
	実施場所の説明 『極楽の森』の説明 作業上の注意 作業班分け	実施場所の説明をおこない、『極楽の森』について知ってもらう なぜ普通のカマではなく長カマを使用するのか、また、 なぜ白っぽい服装で作業するのかなどの意味を伝え、自然に向き合う心構えを学習する
1	森人(もりんちゅ)の下草刈り体験	
	大人のリーダーによる実演指導	長カマの使用方法を実演で指導し、正しい使い方を学ぶ 刃物カバーの意義を伝えるとともに、道具の管理や扱う上での注意点などを意識してもらう  
1	森人(もりんちゅ)の木材加工体験	
	国有林の間伐材を使って、キーホルダーを作製する	木材の温もりを感じてもらい、手作りの楽しさを体験してもらう 全員が作品を仕上げることができるよう、また、怪我のないように注意する 
1	森人(もりんちゅ)の参詣道ハイキング	
	「世界遺産・高野山」までの参詣道を歩く	高野山への参詣道の一つである『不動坂』を歩き、開創1200年の歴史と自然にふれてもらう
2	まとめ・発表	
	学校に帰って絵を描く	体験した内容を絵に描いてもらい、高野山駅及び極楽橋駅、南海高野線の車両に掲出する
(4) プログラムでの連携内容（①学校、②地域）		

(5) 活動の分析 (学習指導要領との関連または森林環境教育の視点) 上位3項目		
5 管理	植樹したイロハモミジの育成のために下草刈りを実施し、樹木が育つのに必要な維持管理作業を学ぶことができる	
1 感情的	樹木や草花のある景色を眺めたり、川のせせらぎに耳を傾けたりして自然を体験することができる	
6 歴史	高野山への参詣道の一つである『不動坂』を歩き、高野山開創1200年の歴史にふれるきっかけをつくる	
教科	項目	学習内容
6年 社会	歴史や文化のかかわり	高野山の魅力は山内に建ち並ぶ寺社仏閣だけでなく、町を囲む緑深き森林も含めた紀(木)の国の歴史であることを認識する
5年 6年 道徳	自然環境を大切にする	自分自身が植樹し、維持管理しているイロハモミジを生涯にわたって見守ることで、自然環境保全の意識を高めるようにする
3～ 6年 総合	探求的な学習	「なぜ、空海が都から遠く離れたこの高野山の地に、真言密教の道場を開いたのか」に思いをはせる
(6) 活動の分析 (資質・能力の視点)		
3 多目的	高野山の魅力は寺社仏閣だけでなく、周囲の森林も含めた紀(木)の国の全てであることを認識するきっかけとなる	
(7) 実施後、参加者の変化		

豊かな森林へ！



世界遺産・高野山の玄関口

「極楽の森」をよみがえらせよう！



平成22年3月

極楽の森

極楽橋森林整備プロジェクト実行委員会

和歌山県高野町 和歌山森林管理署

「極楽橋」は、明治から昭和の初めにかけて、高野山へ登る表参道のひとつ「不動坂」として参詣客で賑わいました。現在は、ハイカーに人気の「世界遺産・高野山の玄関口」として、静かな佇まいが残っています。しかしながら、この極楽橋周辺は近年十分な手入れがされず、雑草やツルが生い茂り、自然環境が損なわれていました。そこで、世界遺産高野山の玄関口にふさわしい自然景観とするために、平成20年12月に「極楽橋森林整備プロジェクト実行委員会」を結成しました。平成21年4月からボランティアを募集して、草刈りやツル切りに加えて、かつての紅葉スポットを取り戻すためにモミジの苗木を200本植樹。紅葉の名所としてよみがえらせるとともに、高野山を訪れるお客さまに楽しんでいただけることを目指しています。

参加者
募集中



「極楽の森」の森づくりに参加しませんか？

実施時期／7月、9月（年に2～3回）

主な内容／下草刈り、ツル切り（1～2時間の作業です）

〔ボランティアに関する問い合わせ先〕

南海電気鉄道株式会社 営業促進部 ☎06-6644-7502

（極楽橋森林整備プロジェクト実行委員会事務局）

〔極楽橋森林整備プロジェクト実行委員会 関係団体〕

高野山真言宗総本山金剛峯寺、和歌山県高野町振興局、和歌山県高野町役場、森林組合こうや、高野「めざめ」の森づくり実行委員会、仙人（そまびと）倶楽部、和歌山森林管理署、南海電気鉄道株式会社



誰でもできる！森づくり体験

高野山国有林の「極楽の森」を主な活動フィールドとして、世界遺産・高野山らしい森づくりを目指して様々な取り組みを行っています。皆さまも一緒に参加しませんか？



植樹 平成22年3月にボランティアの皆さまとともに、モミジの苗木を約200本植樹しました。



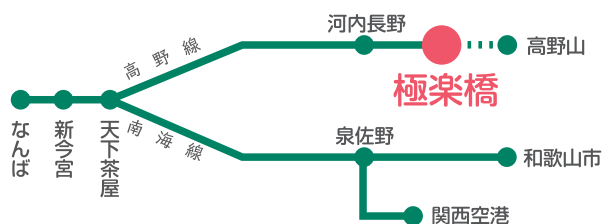
下草刈り 植樹したモミジの成長を妨げる雑草を除去します。これをしないとせっかく植えたモミジが枯れてしまいます。



整備前 平成21年4月から整備をはじめた「極楽の森」は約5年の年月をかけ、モミジは成長し、美しい景観となっています。

極楽の森までのアクセス

なんば駅から極楽橋駅まで急行で約1時間40分。極楽橋駅下車すぐ

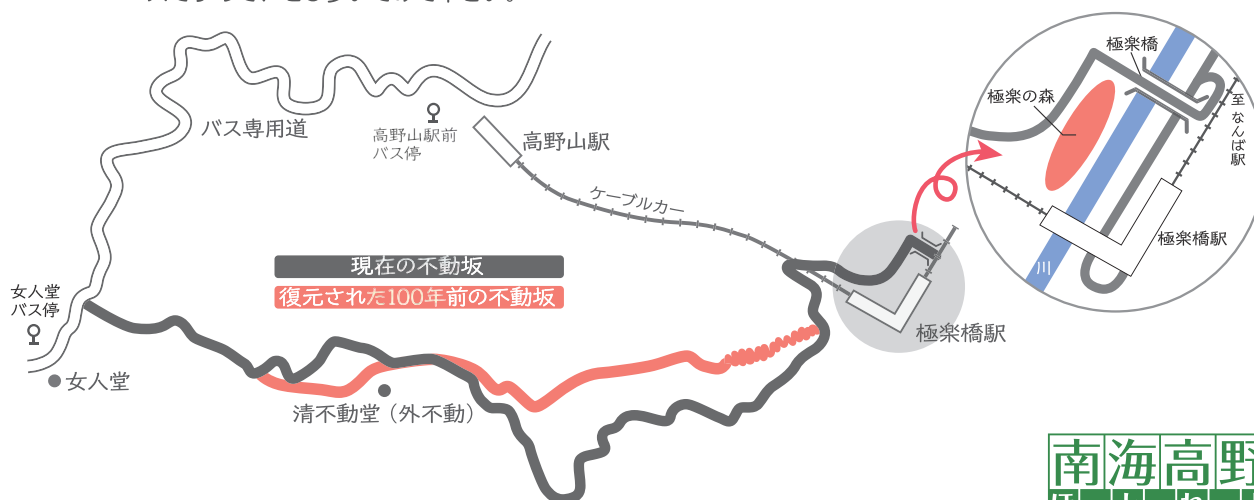


整備後



歩いてみよう！ 不動坂道(京・大坂道)

極楽橋から女人堂までは、高野山への参詣道として「不動坂道」と呼ばれ、現在の不動坂道は大正時代に改修整備された道です。また、最後の難所であった「いろは坂」「岩不動」や「稚児滝」など旧跡が多数ある復元された不動坂道(旧ルート)もあります。極楽橋から女人堂まで約2.5kmを約50分で歩けるハイキングコースですので、ぜひ歩いてみて下さい。



当イベントの取組みに関する情報 ▶▶▶

南海高野
ほんと・ねっと
<http://www.nankaikoya.jp>

事例報告 H27-10

団体名： 特定非営利活動法人 バイオマス丹波篠山 （兵庫県）

プログラム名： 里山の知恵と人とを未来につなぐ		
(1) プログラムの目標	里山の多面的な有用性や知恵を忘れつつある現在社会。人が山には入ることや、木材を利用することをもう一度身の丈に応じた形で見える化し、木材、木質バイオマスを利用することで持続可能な社会形成や、地域形成を行うことができるとともに、人材育成を目標とし里山と人、人と人のつながりを取り戻す。	
(2) プログラムの概要	篠山の里山の現状を知ることが大事で、それを目の当たりにし、周りの人に伝え意識を共有することで、地域の課題を認識し、ともに解決していく人づくりをしている。 ・森林環境教育に関わる地域教材化とその道のプロを先生として招聘 ・木質バイオマス利用普及啓発活動 ・多様な団体との連携による地域後継者育成、就労体験	
(3) プログラムの展開		
時間数	プログラムタイトル	
	活動内容	指導・支援の方法、ポイント等（教材等）
5	森林環境教育に関わる準備 地元、小学校5年生（15名）との調整作業に関わる安全対策、地域の先生（5名）となる人の教育。木工体験の下準備	地域の里山と地元民との関わりから調査し、また古老なども同行してもらい、山、谷の名前の由来を説明してもらうことから、子どもの記憶に残る。事前に学習のポイントを総合学習の中で学習してもらう。地元の人でも知らないことを改めて知ること大人の地域学習として必要。
4	人工林の間伐体験、林業学習、里山の現状を知る 前述学習の中で、事前に子どもたちに木と山との関係性を学んでもらう。間伐をする意義、実体験などから林業の必要性、普段体験できないことを身を持って学習する 	生物多様性の観点も含めて、森林環境の大切さ、地球温暖化防止の意義も学ぶ。タブレットなどを持込、現地にVTRなどの視覚的学習も必要。林業体験から協働で作業する喜びを分かち合うことで、思いやりにつなげる。プロの仕事を理解することで未来の後継者育成も視野に入れる必要がある。 
4	間伐材の利用、木質バイオマス製造施設の視察。 間伐、玉切りした材を子供自ら搬出。昔の人の辛抱強さ、やり遂げた喜び、助け合う心を育成。小学校で薪割り体験、収穫祭焼き芋の燃料として利用。また手製ペレット製造工場を視察し、木から燃料ができることを学んでもらう	搬出時体力の差があるため大人が補助。または子どもにアドバイス。安全管理も必要だが、事前に子供に考えさせる力も必要。木質バイオマスエネルギーを使うことの大事さ、有用性（森林、温暖化、水、生物）を学んでもらう。  
発表会		
地域を教材とした学習を小学校学習発表会で地域の人、保護者、関係者に公開（250名）		子どもたちの視線で学んだことを地域に拡散させる。発表の内容にアドバイスする。（道具の名前等）
多様な団体との連携による地域後継者育成、就労体験		
グラップルなどの重機試乗、作業体験、薪割り体験		安全管理が大事である。林業では木材の搬出が労務費の大半である。それを重機を使うことで早く安全に作業できることを学んでもらうことができる。 

（４）プログラムでの連携内容（①学校、②地域）		
①平成２６年に事前教員の伐採体験会を行い、先生との意見交換から課題など検討した結果、本年度は先生方の理解もあり、森林学習及び林業体験、職業体験という幅まで広がった。生徒に事前学習を行ってもらうことで、森林環境学習の意義がわかってもらえた。学習内容を発表会という形で結果を残すことができた。 ②地域（地元）の先生を集めることに苦慮した。古老となると現地までの移動も大変であったので、麓で話してもらった。過去の歴史と里山の関係も我々も学べた。伐採先生、薪割り先生、木工先生などと役割を分担し、大人も楽しんだ。		
（５）活動の分析（学習指導要領との関連または森林環境教育の視点） 上位３項目		
6 歴史 ・文化	過去、その地域での生業、里山との関係性や、歴史を知ること、小学生でも地域に根ざすことの大事さや、大人とのコミュニケーションの大切さを学ぶ。また、昔の生活を知る（もったいない、感謝の心）事や、薪、ペレットなど地域にある再生可能エネルギーが持続可能な社会を形成につながることを学ぶことができる。	
3 多面的 機能	里山の恵み（林産物、エネルギー、CO2吸収、保水などの森林機能、植生物多様性）など体験することで、普段の生活に欠かせないことが学べた	
5 管理 ・維持	森林整備の方法を学んで林業として活躍する人やグラップルなど重機運転体験からのカッコよさや自分たちで体験することでしんどさがわかってもらえた。孟宗竹の利用がなくなり侵入竹が人工林を蝕んでいることも学んでもらった。、	
学習指導要領との関連 （上位３項目）		
教科	項目	学習内容
5年 社会科	森林資源の働き	森林の持つ多面的機能（空気、水、植生物多様性）を理解するとともに、木質エネルギーとしての資源活用も学習した。
5年 総合	地域の宝探し	地域の活躍する人と、他地域には無いものを探すということから、自慢できる地域であることが分かる。林業体験を通して、学習発表会で発表できた。
5年 図工	感じたこと、想像したこと、見たこと、伝えたいことの表現	道具の使い方、いろんな輪切りの木を組み合わせ、着色、装飾し木を使うことを学んだ。
（６）活動の分析（資質・能力の視点）		
6 つながり を尊重	地域の先生としてと多様な人がかかわることで地域の人との関係や、学校の先生だけが先生でないことが肌でわかってもらえた。最初はあまり興味がなかった子どもも目をキラキラさせて、伐採体験の中での講師の話を聞いていた。	
3 多面的、 総合的に 考える力	一つのことが完成形でなく、過去からの多様な取り組みがあつての里山の状況を教えることができた。エネルギーの利用についても、薪、ペレット等が近くにある（エネルギー）ことがわかった。	
4 コミュニ ケーショ ン	発表会では、シナリオを考えるためにクラス一体となり、役割を分担し学んだことを発表した。もう少し教えて欲しいと助言を求められ、子どもなりの熱いものを感じることができた。	
（７）実施後、参加者の変化		
山の荒れ具合を目の当たりにし、間伐の意義が必要であることがわかったようである。「自然はすごい。ササユリが生えたらいいな。」とか、「木を切ることの大変さがわかった。」、「薪割が楽しい。」、「木工体験が出来て楽しかった。」などの声が聞けた。学習発表会では体験を通して一生懸命表現していた。		

里山資源の新たな利活用

特定非営利活動法人 バイオマス丹波篠山

組織ミッション：木質バイオマスで地域を元気に！持続可能な社会を未来に！

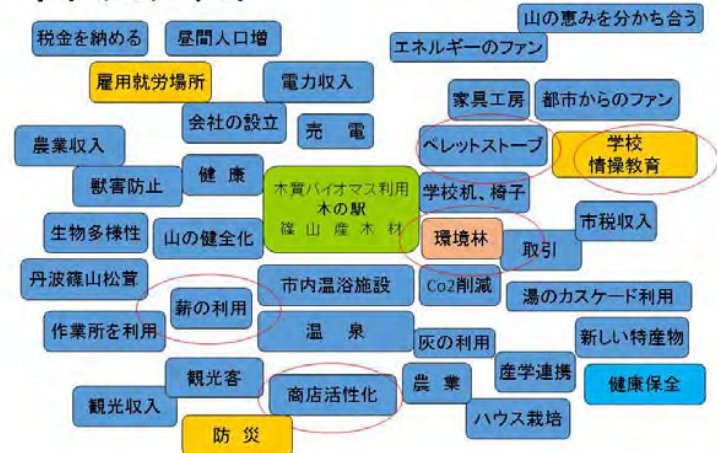
- 豊かな自然環境を次世代につなぐ→里山環境保全
(森林再生復元環境意識の向上)
- 里山とそこに暮らす住民がより豊かに→地産地消、エネルギー
(農林業の振興雇用創出、地域創生)
- 山の資源の再生
(丹波篠山松茸)



環境省「平成23年持続可能な社会づくりを目指す事業型環境NPO」の事業採択を受ける



山のめぐみ



里山の為に何ができるか～ 私たちができることから

- 里山環境教育
(未来の子どもたちの為に)
- 木質エネルギー利用啓発
(木質ペレット、薪)
- 企業後継者育成への取組
(職業体験)
- 森林環境改善
(里山救援隊)
- 流域連携
(恵みの共有)
- 地域商店活性化
(木の駅Prj)



里山環境教育 (小、中学生への取組)



実際に切ってみよう



初！チェーンソー



里山がわかる！紙芝居



切った木がもったいない！
重いけど……

企業後継者育成への協働取組（職業体験）



里山のエネルギー地産地消を進める

・薪製造



・木質ペレット製造、ストーブ販売



篠山市が里山のエネルギー地産地消を進める



流域連携（東播用水組合員の参加）



お手伝いいただいた皆様



子どもも参加



三木の刃物会社による昔の道具説明

里山の森林環境改善（里山救援隊）



教えています。



おつかれさまでした。



竹も粉砕。



里山資源の使い方としての提案

木材を生むのが山だけでなく・・・

- ・割りばし
- ・木製看板
- ・広葉樹板（化粧板、家具等）
- ・環境教育（あそびの場として）
- ・スポーツ利用



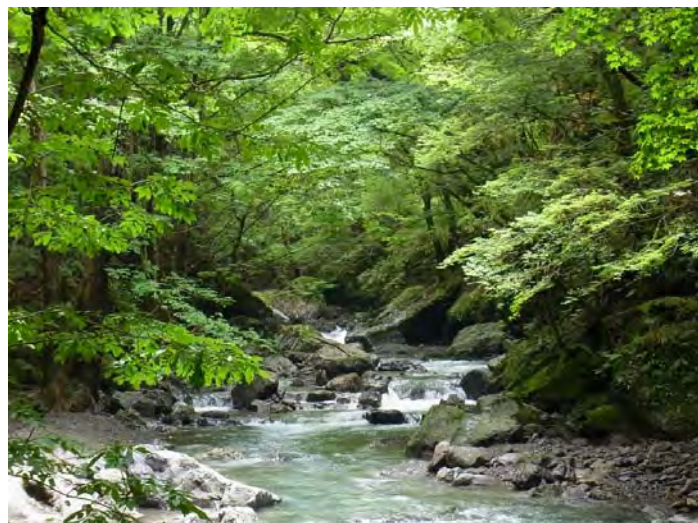
事例報告 H27-11

団体名： 公益財団法人 吉野川紀の川源流物語 （奈良県）

プログラム名： 水源地の森ツアー（一般募集）		
（１）プログラムの目標	・水を育む源流の森に触れ、森の保全の重要性と村の取り組みを知る ・自分の生活と源流の森とのつながり、森を構成する生命とのつながりを感じる（想像する） ・楽しみながら、森や川に興味を持ち、自分の生活を見直すきっかけとする	
（２）プログラムの概要	・水源地の森の散策 ※小学校の校外学習、学校・企業・生涯学習グループ向けツアー、森と水のワークショップ等、内容は異なる部分もあるが、基本的に同じ	
（３）プログラムの展開		
時間数	プログラムタイトル	
	活動内容	指導・支援の方法、ポイント等（教材等）
（分） 15	オリエンテーション スタッフ・参加者自己紹介、 ツアー趣旨説明、	・水源地の森は川上村が購入し、保全しているため入山が制限されていることを伝え、何故森を守らなければならないのか考えるきっかけを与える 
	移動 水源地の森登山口へ移動、 川上村の紹介、	・川上村の面積、人口、森林率、吉野林業、大滝ダム、大迫ダム、吉野川分水などをキーワードに木と水と人の共生、水源地の村づくりを意識してもらう 
15	散策準備 山の神様参拝、 注意事項、 準備運動、	・昔から森の恵みをもらって暮らしてきた山村の民俗文化にも触れる ・安全に森を散策したり、学習したりするために、準備したり、危険な行動、生物について予備知識を身につけてもらう
	人工林散策 人工林について説明、 森の役割について説明、 自然観察、 	・人が木を使ってきたこと、木を使うために育ててきた歴史と、よく手入れされた人工林と、木が売れないために放置されるようになった人工林を比べ、森の役割の大切さを実感してもらう ・動物、植物など様々な生物の観察を通して、生物多様性とその重要性に気づいてもらう  
45	昼食	
		・森の中で自由に過ごしながら森の魅力を感じてもらう ・気温や水温、水の硬度などを調べ、数値から森の役割を想像してもらう
15	人工林と天然林の比較	
		・人工林と天然林を比較するが、どちらの森も大切だということ、それぞれの森と自分たちがこれからどのように関わっていくべきか考えるきっかけを与える

時間数	プログラムタイトル	
	活動内容	指導・支援の方法、ポイント等（教材等）
(分) 105	天然林の散策～下山 天然林について説明、 森の役割について説明、 自然観察、 河原の様子比較、 	・紀伊半島の成り立ちと、吉野川紀の川源流部に残された豊かな生態系を自然観察をとおして感じてもらう ・水源地の森と伐採された森の河原の様子を見比べ、一度自然が失われてしまうと、それにかかわるものが次々と崩れてしまうことと元どおりにならないことを実感してもらう 
	移動 質問、 川上村のPR、	・過疎化、高齢化がすすむ川上村が取り組むべきこと、川上村を観光の視点から話し合ってもらう
15	まとめ 参加者に感想、 自然のためにできることの勧め、	・参加者の感想を聞き、それを川上村や水源地の森のことを知らない人に伝えてもらうように促す ・水源地の森から吉野川紀の川や吉野川分水の水の流れ、または川上村の木材などでつながる自然や環境をみんなで協力して自然を守っていくために、各自でまずできることから取り組むようにまとめる
	（４）プログラムでの連携内容（①学校、②地域）	
①森と水の源流館の見学と併せて、より深く森や水のことを知りたい場合は、水源地の森ツアーを行った。		
②地域の住民に聞き取り調査し、自然利用について明らかにしてきた。		
（５）活動の分析（学習指導要領との関連または森林環境教育の視点） 上位３項目		
2 自然的 特性	川上村・水源地の森の地理・歴史を知り、動物や植物を見たり、鳴声を聞いたり、触れたり、観察しながら豊かな生態系に触れる。	
3 多面的	手つかずの原生林、伐採され再生しつつある天然林、人工林、またそれぞれの河原の様子を見比べ、水源涵養、災害防止、生態系保全など森の働きを知る。	
4 現状・課題	水源地の森から生まれる水は川へ海へと流れ、流域や吉野川分水でつながる人々が水道や田畑、工場で使い、そこで作られた物は全国へと届けられている。しかし、温暖化やシカの食害、後継者不足など、様々な問題を抱えている。	
教科	項目	学習内容
3・4年 社会	飲料水の確保	自分たちが飲んでいる水のふるさとを訪ね、それが生まれる森について知る。水を汚さないように意識する。
5年 社会	森林資源の働き	森が水や空気や生物を守ったり、自然災害から人を守っていることを実感する。
総合	総合的な学習	水源地の森での自然体験をとおして生きる力を養う。
（６）活動の分析（資質・能力の視点）		
3 多面的	森で見たもの、聞いたもの、感じたものが自分の暮らしまたは人にとってどんなふうに役立っているのかを考え、水も空気も木も森があるからだ気づききっかけとなった。	
6 つながりを尊重	森から育まれた水も空気も木も多くの人々が利用しているものなので、自分勝手に使ったりせず、次につながる人のことを思いやれるようになった。	
（７）実施後、参加者の変化		
「いつも使う水の生まれる森を大切にしたい」「水を汚さないようにしたい」「森のために間伐材の割り箸を使う」「知人に勧める」など自然への興味と畏敬、森が大切なものであるという認識が生まれた。その経験を、ボランティアガイドや生態系調査に同行したり、他の場所での体験に活かせるようになった。		

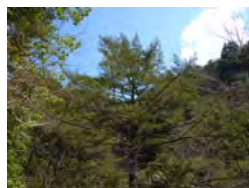
「吉野川源流－水源地の森」の取り組み



「吉野川源流－水源地の森」

川上村は川上宣言を具現化するため、吉野川・紀の川源流、三之公天然林約740haを購入し・保全しています。

吉野川源流－水源地の森の生き物



トガサワラ



キヨスミウツボ



ヒロハシノブイトゴケ



ニホンカモシカ



ナガレヒキガエル



オオセンチコガネ

森の中では今、この瞬間も様々な動植物が生息・生育し、森林生態系を支え、私たちに森のめぐみをお届けしてくれています。

水源地の森を守るために私たちができること

多様な主体との相互理解・連携を進めています。



自然生態調査

水源地の森の自然の状況を科学的に調査・記録し、保全に役立てます。



水源地の森ツアー

水源地の森の大切さを、わかりやすく伝えます。この参加者の中からもボランティアスタッフなど“森の担い手”が育っています。



学校・教育機関との連携

次代を担う子どもや若者たちに自然の大切さを伝えることはとても大切なことです。小学校から大学まで多様な体験プログラムを展開しています。

川上宣言

- 一、私たち川上は、かけがえのない水がつくられる場に暮らすものとして、下流にはいつもきれいな水を流します。
- 一、私たち川上は、自然と一体となった産業を育てて山と水を守り、都市にはない豊かな生活を築きます。
- 一、私たち川上は、都市や平野部の人たちにも川上の豊かな自然の価値にふれあってもらえるような仕組みづくりに励みます。
- 一、私たち川上は、これから育つ子供たちが、自然の生命の躍動にすなおに感動できるような場をつくります。
- 一、私たち川上は、川上における自然とのつきあいが、地球環境に対する人類の働きかけの、すばらしい見本になるよう努めます。



川上村有林「吉野川源流－水源地の森」は、条例により一般の立ち入りを制限しています。原生林をそのまま保全するため、歩きやすい遊歩道なども設置していません。一般の入山は公募により実施する「水源地の森ツアー」など環境学習ツアーをご利用ください。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。



森と水の源流館

奈良県吉野郡川上村宮の平
電話 0746-52-0888
ファックス 0746-52-0388
<http://www.genryuu.or.jp/>